

『蟹工船』へ

倉田 稔

目 次

はじめに

- 1 芸術勉強会
- 2 森との交流
- 3 山宣と小樽
- 4 革命か芸術か
- 5 「ネヴオ」
- 6 「三・一五」から「蟹工船」まで
- 7 『蟹工船』

はじめに

これは、小林多喜二伝（31）である。

1 芸術勉強会

1928年の11月頃、小林多喜二から風間六三に連絡があって、「芸術理論について良い資料が出たから、その研究をオレの家でやるから来ないか」との誘いを受けた。

風間はこう書いている。

夕方うす暗くなった頃、若竹町の小林三星堂支店の看板のかかっている小林宅へ着いた。多喜二はまだ銀行から帰っていなかった。

母セキは、前もって息子から話があったせいか、待 [ち] もうけていた気配が顔色に見えた。駄菓子を入れたガラスのふたのついた平箱が十個ほどどす黒い凹凸の土間に斜めに置かれ、ひろげられていた。室内の天井や襖は黒

くすすけて光って見えた。隣室は見えないが、第三吾のヴァイオリンの音が聞こえて来る。「G線上のアリア」のようだった。

母セキは、「さあ上がって、アニはまだかえらねえですが、晩御飯はまだなんでしょ」と云うので、風間は茶の間に上がってストーブの傍に座った。

所在なさのために、中二階の多喜二の部屋に通ずる小さい梯子段を昇って見ることにした。無断でであった。多喜二の屋根裏の勉強部屋を見たかったからである。最近改築したのか、切り窓だけは新しく、目につく。本棚には色々なものがギッシリある。並べきれないので、畳の上へ壁に沿って並べ立ててある。まだ新しい「ゲーテ全集」が全部ある。

座敷に戻ると、ヴァイオリンが止んで、三吾は外へ出ていったらしい。やがて風間の顔見知りの小樽高商での三浦強太と野口七之助がきた。

組合の森良玄も島田正策もきた。風間が組合の連中にも文化運動を理解して貰おうと、誘っておいたのであった。広川広司もきた。伊藤信二は、製缶工場の夜業だったらしく、来られなかった。

多喜二は、風間が中二階にいるときに帰ってきていて、隣室から銘仙の羽織の紐を結びながら出てきた。

「ゆっこちゃん、お客さんにパンだよ」と多喜二が言うと、妹が二人出てきて、⁽¹⁾お客たちのために食パンを焼いてバターをぬってすすめてくれた。

入口と反対側の茶の間の切り窓からは、しょっちゅう、築港駅から貨車の入れ替えて、きしんだりぶつかったりする音が、聞こえて来る。平和な一家団らんの空気が感ぜられた。多喜二がこの一家の支柱であることが、まざまざと推測された。

テキストは、ア・ルナチャルスキー⁽²⁾の『実証美学の基礎』で、風間も他の何人かの人、それを取り出し、まず小林が「さてブラブラ始めよう……」と切り出したので、一同笑った。

チューターとして多喜二が、何頁か読み、それを皆で検討・質問・疑義への注釈をやった。組合の森らは、用があるから終りまでいないで、帰っていた。夜九時半ころ、まず切上げ、皆は帰りかけた。風間は、「ちょっと多喜二

に話があるから」と、言って残った。

風間の話は、こうだった。組合の人々の了解をえて、風間が来月(十二月)北方海上属員倶楽部へ居を移すこと、そこから発行されることになった海員の親睦新聞の編集にあたることになったこと、そこで言った。「ナップとしての方針を立てたいが、いついつオレの処へこないか、伊藤を交えて是非相談しよう、それに最近東京からくる出版物はほとんど発禁つづきで、組合にいても配布できぬ状態だから、一石二鳥だよ。」

そんなことを語ると、多喜二は、

「実は二、三日前、特高の石永六兵衛が銀行へきて、主任と話してから、オレの前を通過して首実験しにきやがった、威圧しに来たんだ、こんな風に」と、石永の格好をして見せた。⁽³⁾

「三・一五」が発表されてから、小林に対するスパイ^(3a)の監視は一きわ嚴重になった。毎日のように私宅にも銀行にも何人もやってきた。勤先きを首になることも覚悟を決めなければならなかった。いつひつばられてもいゝだけの心構えも必要であった。⁽⁴⁾

山野千衛は書く(以下、現代字にする)。ちなみに、山野は、佐貫徳義のペン・ネームである、と。⁽⁵⁾

昭和三年の十一月頃だった。小林がルナチャルスキーの「文学の社会的基礎」だったか「マルクス主義文芸批評の規準」だったかを手に入れて、ぜひ皆んなで研究してみようというので、彼が提唱して研究会を持つことになった。ナップのメンバーが五[,]六名と労働組合からも一人参加した。その晩、町外れの小林の家へ集まった。その開会のときだ。一寸、緊張した一座が、小林の口元へ集中した。と彼が「さて、これからブラブラ始めることにします」と真面目くさって云ったものだ。

皆は一度に笑い崩れてしまったのだ。「ポツポツ始めようか」と云って切り出すのが彼のいつもの癖だったのだが、その時どう間違えたのか、ブラブラと云ってしまったのだ。彼は一寸マの悪そうにニタニタ笑ったが「いや、ぶらぶらだ。さてぶらぶら始めよう」と云ってのけると そのまま会を開いた。

彼はいつもこんな機転を少しも企まないでスラスラとやっつてのける。意識してやるのではない。自然にでてくるのだ。彼の場合、このスラスラと、いう言い方が一番よくあてはまるようだ。

彼のこうした、ちょっと類例のないところが、人を知らず知らずの中に、彼の話題へ、ひっぱりこんで行くのだ。会が終わったのは大部晩かった。隣室で炬燵に暖まりながら義太夫の本か何かを読んでいた小林のお母さんに挨拶すると、一人、二人づつ帰って行った。僕はお母さんにすすめられるままに、炬燵に潜りこんでいた。凍てついた雪路に、足駄をギユつギユつといわせながら、皆んな遠ざかって行った。寒い夜だった。間もなく、後片付けを終えた小林は隣室からやってきて、炬燵へ一緒になった。彼は手にしていたその日の新聞を広げて、お母さんに読み聞かせ出した。

東京朝日だったと思う。小林の小説「一九二八年三月十五日」について素晴らしく讚めた記事がのっていたのだ。小林はその記事をお母さんに理解させようと、諄々と、批評上の六ヶ敷い言葉などを噛み砕いて説明してやっているのだ。小林の教えようとしていることの半分も彼のお母さんが本当に理解したかどうか。だがお母さんは小林の話の一つ一つ頷きながら「家の兄も新聞に、そんなに褒められるようになったか……」と心から嬉しそうに聞いているのだ。僕は小林が何時でも、お母さんに、いろんな事実について、殊に、社会関係のことを新聞だとか、雑誌から、くどくどと納得の行くまで説き聞かしているのを、それまで何遍も見だし、其の後もよくそうした情景を見た。だが、あの晩の炬燵の中での、二人の母子の情景だけは今でもハッキリ目の前に浮かんで来る。恐らく生涯忘れられないものの一つだろう。⁽⁶⁾

(1) ツギと幸。

(2) アナトリー・ヴァシリエヴィチ・ルナチャルスキー (1875—1933)。ボルシェヴィキの教育学者、人民委員になった。

(3) 風間六三「小林多喜二の思い出」(『北方文芸』7)。

(3a) この当時は、警察官を指す。

- (4) 佐貫徳義「人民の作家小林多喜二」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年) 5 ページ。
- (5) 因藤荘助「多喜二のプロフィール」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年)

佐貫徳義と多喜二とのかかわりは、こうだった。

僕が小林と知り合ったのは、……昭和二年の四月、であった。

夜間だけ小樽図書館の雇をして学資を稼いでいた。「当時その図書館の一室はいろんな文学傾向をもつて青年たちのいゝ集会所であった。そんなわけで小林は銀行がひけると決まって顔を出した。グループの中心はやはり小林であった。駆け出しの文学青年だった僕に対しても小林はいつも熱心にA、B、Cから話してくれた。新しい若いものをみつけだし、才能の芽を育てあげようとする努力(これはあながち文学の領域だけのことではなしに、あらゆる分野で)と、その熱心なところに小林の人間的なよさがあった。僕はさうした点にすっかり惚れこんでしまった。ルナチャルスキーをこなしている彼の芸術論、文学論の造詣には僕達はすっかり傾倒させられてしまった。彼は小樽中学系統の若い僕たちの文学グループの同人雑誌のために「AからLまで」という分りやすい文学論を執筆してくれた。銀行の小型用箋にぎっしり書きこまれたその小論で彼は芸術の階級性について克明に箇条がきに誰でも理解させるように説明していた。

「分からないところがあつたら 何時でも集りによんでくれ。一緒に勉強しよう」と言つて、その原稿を渡されたときの感激を僕は今でも忘れることができない。僕にとって小林と知り合ったことが生涯の大きい転機となった。(佐貫徳義「人民の作家小林多喜二」『青年論壇』4 ページ。)

- (6) 山野『小林多喜二を回顧する(二)』14-15 ページ。

2 森との交流

十一月中旬、森良玄は初めて南小樽の小林の家に行った。冷たい雨の降っ

ている夜だった。古川一派との合同研究会だった。何でそんな会合が出たのか、森にはおぼえがない。風間の「小樽にて、小林多喜二の思い出」（『北方文芸』）と森の記憶は違う。

そこで森は、古川友一と大論争を始めてしまった。古川の挑戦に乗せられた。古川は春に一度会ったきりだが、彼 [=古川] の起草した組合の宣言綱領を捨てて、別な宣言綱領を書いたのが森であることを、[古川は、鈴木]源重から聞いて知っていた。「あの小児病野郎、また弾圧で組合をつぶしてしまうぞ」と、[古川は]森に強い反感を示していた。森は負けていなかったのに、古川は文芸上の論争から日本共産党の悪罵にそれてしまった。例によって、極左、小児病等々であったが、しまいには彼 [=古川] は、下劣な——森による——侮辱を繰り返した。

「実践、実践と言うが、カーペー⁽⁷⁾は何もしないじゃないか。『無産者新聞』一部五銭、二部売って十銭、その十銭が実践かい」

実に下等な、洒落にもならぬ悪罵——森による——であった。これは古川の創作でないが、よほど気に入っていると見え、二度も三度も繰り返す挑発とわかっていても、森は激怒してしまった。

「官許マルクス主義者が何を言うか、『無産者新聞』も、雑誌『マルクス主義』も発行されているじゃないか。党は先頭で戦っているんだ。スパイもしかねない君等官許マルクス主義者に、一々御報告申し上げる義務は、チリ一本ないんだ。」

森はほえるようにどなりつけた。官許マルクス主義と言⁽⁸⁾うのは、彼 [古川]等にとって最もいたい、恥ずかしい侮辱であった。古川を罵倒した森は、古川の反論を待たないで帰ってしまった。実に無礼な振舞いだった。お蔭でその夜の会合はつぶれてしまい、それから合同研究会は開かれなかったと、森は聞いている。

次の夜、森は北方海上属員クラブで、海員たちと雑談している小林を見つけることができた。前夜のことが気になっていたのに、小林に謝罪しようと思っていた。小林は何も言わなかったが、頃合を見計らって購買部で煙草を

買って来た小林は、森にバットを一つくれた。森が煙草をのまないのを、多喜二は知っている。連絡であることはすぐ分かった。バットの内側に書いてあった日時に従って、拓銀の宿直室に行った。拓銀小樽支店は大通りの角にあったので、どちらからの見通しもよく、目立たないように通口からすべり込むには、細心の注意が必要だった。鉄のドアのノブを握ると、内からドアが開かれて、森は素早くすべりこんだ。小林が内側から待っていてくれた。かなりの時間だったと見え、小林の顔も手も冷えて蒼白になっていた。

先夜のお詫びに、いや痛快だったよと、かえって喜んでくれたりした後、ひどく緊張した小林は、ためらいがちに言いだした。

「こんなこと聞いてはならんことは、知っているんだが、党は今どうなっているの」

森はチョット虚をつかれた形だったが、小林が知りたいのは分かる。しかし本当のことを言うことは出来ない。

「それが、僕等にもハッキリしないんで、ジリジリしているんですよ……だが何故僕にそんなこと聞くの」

「いやァ、この間古川をやっつけた時、あまりにも断固としていたんでね」

「あの野郎卑劣な奴だ、人が答えようのない事を追及しやがる」

小林は、森が嘘を言っていることをハッキリ見抜いていた。しかしそれ以上追及しないで、書きかけの「蟹工船」の原稿を見せてくれて、森の意見を求めたりなど、いつもの二人の楽しい時間に入った。

小林と二人の会合は、いつも十時前に打ち切ることにしていた。あまり遅くなると人目に立つからだった。しかしその夜は1時すぎになってしまった。森は小林に嘘を言い通さなければならぬ傷みがあり、小林は聞いてはならぬ事を聞いて、森につらい思いをさせた悔があるので、二人共、相手の心の傷をあたため合うような気持ちで別れたかったのである。

帰り際に、森は小林に、自分が来る時仕出し物を取らないよう注文した。仕出し物から森の足取りを特高に嗅ぎつけられるのを警戒したのだ。

小林は、ますます森が党の活動をやっているかと確信を深めたのであろう、

心をこめて送り出してくれた。実に心の暖かい胸の広い小林であった。⁽⁹⁾

(7) 共産党という意味。

(8) 森（『文芸北見』）283 ページ。

(9) 同，284 ページ。

3 山宣と小樽

1928年12月3日に、代議士・山本宣治⁽¹⁰⁾が小樽に来た。彼は、京都出身で、カナダ留学をし、東大を卒業した。そして京都大、同志社大の講師となった。性科学を研究して、産児制限運動をし、労働運動に入った。1927年に、労農党京都府委員長となった。1928年の総選挙で京都2区から労農党公認で当選した。そしてただ1人の本来の労働者側議員になった。彼は、小樽駅前の「つるや旅館」に泊まった。

労働農民党は、この年1928年の4月に解散を命ぜられ、山本は、新党準備会に所属していた。小樽の組合の人々も、彼とは初対面であった。がっちりした闘士型を想像していたが、案外の期待はずれで、キチンと頭髪を分け、痩せたインテリ風なので、皆、少しがっかりした。

色々緊迫した情勢や山本自身の生い立ちや、アメリカ留学中の話をした後で、人間の性の問題にふれ、性器具のくだけた話になり、みんな笑った。風間六三も参加していた。彼らは、山本が学問的に科学的に性の研究をしているナ、面白い男だ、と感じた。

やがて特高が二人きて座に着いたので、山宣は余計に微に入り細をうがった巧妙な話をし、特高も苦笑せざるを得なかった。

その夜、花園町の演芸館で、政談演説会がもたれた。会は大入りで盛会だった。浜の労働者も大勢きた。弁士は、旭川の喜多幸章、俱知安の菊池直芳、小樽の森良玄、島田清作、松本和三、鈴木源重、東京の溝上弥久馬、しんがり山本宣治であった。受付をした風間は、演説を襖越し背中であら

ので、ただガタガタという演壇での中止・検束の声と、巡査の剣のガチャつく音を耳にした。検束されなかったのは、中止でとどめた鈴木源重と山宣で、会が終ってこの二人だけが残った。この二人は、警察へ検束者奪環のため交渉に行った。

その演説会には、小林多喜二と伊藤信二は来ていたように思えるが、はっきりしない、と風間は書いている。⁽¹¹⁾

その後、1929年3月に、帝国議会で治安維持法にただ一人で反対した山本宣治⁽¹²⁾は、暴力団七生義団黒田に刺殺される。3月5日に告別式があり、式場で、河上肇が演説した。

山宣が死んだ時、脳ミソが何グラムと出た。そしたら、「俺の方がきつと重いぞ」と、多喜二は藤橋に言った。彼は頭が人一倍大きかったから。

(10) 山本 (1889-1929)。

(11) 風間「小林多喜二の思い出」(『北方文芸』7)

(12) 『山本宣治全集』全7巻、あり。映画「山本宣治」あり。西口克巳の小説「山宣」あり。

4 革命か芸術か

一九二八年一二月に入って間もなく、小林等のグループから緊急の呼び出し⁽¹³⁾があり、森は、例によって寺田の家に行った。この日は島田清作⁽¹⁴⁾が一緒だった。当時、森と島田は2人で、小樽の党の仮の指導部をつくっていた。『戦旗』の一二月号の付録に重大な無署名論文が載ったので、それに対する意見を求める呼び出しだった。一二月二五日の結党大会を目前にした、新党準備会の発展についての論文である。一読して、党が緊急に『戦旗』付録にした論文であることが分かった。

論文は、労働者階級の真実の政党は、共産党唯一であること、合法政党は無用であり有害である。新党準備会は合法政党として結党を求めてはなら

ない。それは労働者農民の政治的自由を要求する同盟として発展すべきだと言う。これは、現代の文献『日本共産党の五〇年』では、セクト的方針であり、合法的無産政党も一定の役割があったと、後に批判されたものである。だが弾圧につぐ弾圧の中にあった森たちには、すんなり受け止められる方針だった。論文を読み終ってうなずき合う島田と森を見た一座は、急にざわめき立った。いつも秩序正しいグループであるが、結党を目前にして新党準備会が急旋回するとも受け取れる論文なので、よほど興奮していたのであろう。その中に、「では北海道の党組織はどこまで進んでいるのだ」と、森たち2人を詰問するように問いかける者も出てきた。これは世慣れた島田が柔かく鋭鋒をかわしたが、この時も節度のない質問や討論はつつしもうじゃないかと、小林はグループをたしなめ引き締めていた。グループには、学歴では小林より上のものが多く、寺田なぞは文献的知識ではまさっていたようだったが、事物のマルクス主義的判断、人間としての座りでは小林が一頭地を抜いて、グループの重しとなっているように身受けた。

論文の支持を明らかにしただけで、森たちは急ぐように帰った。一座の興奮に巻き込まれるのを避ける意味もあった。帰り途人氣のないのを見計らって島田が言いかけて来た。

「オイ、小林は俺等のやっていることを察しているな」

「うん、そのようだな」

「しゃべったのか」

「いや」

「既定方針で行くんだろう」

「うん、方針変更はしない」

島田が言う既定方針とは、小林を小樽の党組織の中に編入しないということである。島田清作は、小林の作と信じられている「屍も棲み重ねなばバリエード／やがて輝く旗を信じて」の作者である。文学青年だった島田は、小林の作家としての力量、人物のたしかさを、高く評価していた。島田と2人で検討した結果、「小林は小樽のような小さな地区の政治活動に拘束するに

は、貴重すぎる存在である。彼は党中央の直属の黨員として、芸術団体の全国的フラクション活動に就くのが適切だ。次の巡回オルグ⁽¹⁵⁾が来た時それを具申しよう」という結論に達していた。

『一九二八・三・一五』で、警察のテロ拷問を告発した小林が、『蟹工船』では、蟹工船労働者を弾圧する日本帝国海軍の本質を告発しようとしていた。森たち2人は、小林の防衛には全力をつくすが、小林は畳の上では死ねないのではないかと恐れていた。⁽¹⁶⁾

三・一五の全国的弾圧と、八月の中央委員の一部が検挙される弾圧で、出版局を破壊された日本共産党は、1929年にはいつてやっと中央機関紙『赤旗』を復刊できた。復刊された『赤旗』が森の手もとにとどいたのは、2月に入ってからだった。労働者黨員の配布は手早くすませたが、小林にとどけるのは非常に気が疲れた。

[森は]拓銀支店の宿直室に持っていった。例によって入口のドアの内側で待っていてくれた小林と、宿直室に入った森は、無言のまま『赤旗』を小林に渡した。半紙判2つ折り8頁の謄写版刷りの『赤旗』を、更に二つにたたんで渡したが、開いた刷り物が『赤旗』であることが判った時の小林の顔の輝き、森を見上げたおどろような眼の色、森には50年すぎても忘れられないものの一つである。

「すぐ読んでくれ」

「ウン」

小林は、むさぼるように読み始めた。森はいつものようにあぐらはかかず、柔道の試合前の交礼の時のように、膝を開いて座り、足のしびれを用心しながら、小林の方に三分、入口に七分の注意を配り、防衛姿勢をとっていた。難解なものではないから、小林は三十分足らずで読み終った。

「これからどうするの」

「それを、別の室にかくして来てくれ」

「アッソウカ」

ふだん森は、4歳年長の小林にゾンザイな口をきいたことはなかった。年

長の上にマルクス主義の文献の先生格だから、生徒が先生に対するような気持ちでいた。しかしこの時は組織上の責任から、少し指図がましくなったようだったが、小林はチットも気にしなかった。

すぐ戻って来た小林の顔は、喜びに輝いていた。森はその顔をまともに見られなかった。小林が灼けつくような激しさで、日本共産党に入党の望みを持っていることは知っていた。今、森から『赤旗』を渡されたからには、その希望が叶えられる期待に彼は胸をおどらせていた。しかしその時、森は彼の期待にそむくことを言わねばならない、実につらいことであった。森はこの時のために整理し用意した言葉で静かに、森の決心を語った。⁽¹⁷⁾

森の話を聞いている中に、小林の蒼白な顔面が紅潮し、またたちまち一層蒼白になった。

「では、結局俺はダメだと言うのか」

彼は、食いつくような鋭い眼で、森を見据えた。

「ダメなんて言うんではないよ……」

森は重ねて、彼は自分たちにとって大切な人なんだから、小樽のような陣地が浅く、敵前に暴露されているような組織に属し、身体を粗末にはならない。中央委員会直属のメンバーとして、文学運動の全国的組織の指導に当たるのが適切だと思わないかと、頼み込むように説得したが、小林は承知しない。俺はそんな偉い人間ではない。プロレタリアの一兵卒としても不完全な男だと思っている。党のどんな小さな任務でも、この重大な局面で立ち向かいたい、と言って、きかない。これは小林の誇張でも何でもない。自分を特殊な人間だと思ふような傲慢な心はチリ程も持っていなかったことは確かである。世評をわかせた作品『一九二八・三・一五』についても、前衛たちの英雄的闘争と、日本警察の残酷なテロ拷問の事実を、忠実に記録して日本人民の前に暴露告発しただけではないかというのが、彼の信念だった。彼の言葉を借りると、「つまらない記録小説を1つ書いたからと言って、俺を特別扱いするなんて、けしからん」と言う。彼はしまいに、「小説なんか書いているから入党させないと言うのなら、文学なんか止めてしまう」と言い出す

始末だった。いつも物分かりのいい、思いやりの深い兄のような小林なのだが、この晩ばかりは頑固で聞き分けのない人だった。しかし森も決心を変える気にならなかった。

森は言う。小林は、『一九二八・三・一五』をつまらない記録小説だと言うが、これは日本の官憲が労働運動弾圧のためには、どんな無法なことも、どんな残虐なことも手段を選ばない事実を、正面から告発した貴重な文学である。この残虐行為は全国幾十カ所で行われた。文学者の表現技術、構想力をもってすれば、小林が書いたのと別の角度から、さまざまな告発があつて然るべきだ。しかし三・一五弾圧後 47 年、その告発の文学があるとは聞いていない、と森は書く。

「三・一五」を脱稿した小林は、「蟹工船」の稿を起こしていた。この作品は、日本帝国海軍が蟹工船の労働者の争議を弾圧したことを、痛烈に告発した。

日本帝国主義が敗北した 1945 年までは、日本人民は人権を尊重されなかった。中でも 1928 年の弾圧の中、小林は最も狂暴な日本警察権力の惨虐をばくろ告発した。それに続いて、更に残虐な人殺し集団、日本帝国主義海軍の惨虐を告発しようとしていた。死を覚悟しなければできないことではない。森は、当時小林が畳の上で死ねないのではないかと考えていた。それだけに軽率なことをして、彼を敵の手に渡すようなことは絶対にすまいと決心していた。

その夜、彼に『赤旗』をとどけたのも、森の独断で⁽¹⁸⁾ あつた。島田清作にも相談していなかった。これはある意味で党規律違反なので、その責任は自分が負う決心だった。

これらのことを森は、縷々として小林に語った。小林もやっと分かってくれた。納得すれば何時もの兄きの様に思いやりの深い小林にかえる。紅茶などを入れてくれた。『赤旗』は三時までには必ず焼いてしまうよう指示して帰った。⁽¹⁹⁾

森良玄は後年、思い出を書き、小林の入党希望を島田正策から聞いたが、小林とそのことで直接話した記憶もなく、それを中央部にも上申していない、

と言う。しかし実際はここで明らかになったように、「小林とそのことで直接話した」のである。勿論「それを中央部に上申していない。」

さてここで描いた当時の小林多喜二は、なんと革命的ロマンティズムに満ち溢れていたことか。彼は、名作『一九二八年三月十五日』を単なる記録小説であって、大したことはない、と言い放っている。それよりも革命運動に加わる方を望んでいる。小林多喜二が文学者だったのか、革命家だったのかというのは、議論の分かれることであった。だが、彼は革命家たらんとした、というのが正しい結論である。

1929（昭和4）年1月、日本労働組合総評議会に代わって日本労働組合全国協議会が結成されると、小樽運輸労組はこれに加盟した。森は、1929（昭和4）年に、多喜二に運輸労働組合のピラを書いてもらったことがある。この年、森は、四・一六事件で逮捕された。小林多喜二は、後に、森を主人公にした小説『工場細胞』を書いた。河田のモデルが森である。多喜二はこの原稿に「この一篇を『四・一六』の同志森良玄に」と献辞を書いている。森は、1978年6月10日、札幌で死去した。

1929年の三月のある夜おそく、多喜二が若竹町の自宅へ徒歩で帰るというので、風間六三も用があつて方向が同じなので、途中まで歩いて行った。開運町の方へ向かった。風間は多喜二に、今読んでいるものの中で何に一番ひかれているか、と聞いた。多喜二は、「デボーリンの哲学」に一番ひかれている、と答えた。

三月の初めころ、小林は夜に入って「海上生活者新聞」の二階へ上がってきた。風間しかいなかった。小林は座ると、静[か]だがはきだすように言った。「君は年はいくつか」。

風間は何気なく「二十二だよ」と答えると、

「いいなあ、羨ましいなあ、俺は二十六だが……」と言うので、風間はハッとしてドキリときた。返事に困った。風間の解釈は、彼が党へ吸収されぬ無念さを痛憤をもって述べていると。

風間はおし黙っていたので、小林は淋しそうに階下へ下りていった。⁽²⁰⁾

- (13) 森，284 ページ。
- (14) 島田清作（1901－），1928年1月当時，労農党根室支部支部長。4・16に連座。小樽でも活動する。北海道オルグ。
- (15) 『文芸北見』285 ページ。
- (16) 同，286 ページ。
- (17) 同，286 ページ。
- (18) 同，287 ページ。
- (19) 同，288 ページ。
- (20) 風間『北方文芸』7。

5 「ネヴォ」

小樽生まれの佐藤八郎は，昭和3年に札幌に出，映画館の絵看板を画くのが仕事だった。彼はアナキストだった。

組合運動の人々が生活に困っているのを見て，喫茶店でも始めようとした。友人相沢純一⁽²¹⁾と自分たちの手で時間を掛けて作り出した。

2人で話し合い，今後の運動のことを多喜二に相談しようとした。客をよそおって，拓殖銀行に多喜二を訪ね，帰りに佐藤の家〔前後関係から言って，佐藤の小樽の実家らしい——引用者〕に寄ってもらうことにした。

小林は，全日本無産者芸術連盟（ナップ）機関紙『戦旗』を読むこと，また，その配布先について「東京から送り込むアジトが少ないので困っているが，君はまだ目をつけられていないから君の家なら大丈夫だ，出来たら頼む」と言った。佐藤もお役に立てばと，父に相談し，父もそれを承知してくれた。

こうして4，5カ月は無事だった。やがてアジトのことが警察に分かったが，父の機転で，何とか切り抜けた。

その後も時々小樽に行き，小林に相談していた。小林は佐藤のアナキスト

とのつながりを気にしていたらしい。

喫茶店も開店した。名を「ネヴォ」とした。

ある日のこと、突然多喜二が「ネヴォ」の勝手口から入ってきた。その日の多喜二の話は、「ナップ」に美術連盟が所属したから、君も誰かに連絡してプロ美術⁽²²⁾の札幌支部をつくりその仕事をしたらどうかということだった。佐藤はその話を聞き、自分のこれからの道がようやく開けると思った。

四・一六事件の1、2ヵ月後、佐藤も検挙され、しばらく留置され、釈放されてから、喫茶店の別室で、多喜二の色紙と佐藤の小品の即売会を開いた。出品した小林の色紙の中の1枚に

屍も積み重ねなばバリケード

やがて輝く旗を信じて!

小林多喜二⁽²³⁾

があり、永く「ネヴォ」の壁に飾ってあった。これはしかし島田清作の作である。

昭和5年3月末、多喜二は上京しているが、その後、三、四度「ネヴォ」に現れた。

一度は、札幌にもぜひ演劇同盟（略称、プロット）の組織を作るよう努力しては、との話だった。佐藤も演劇運動の重要性を感じていたので、是非にもと、小樽から小林と伊藤信二に来てもらい、第1回の集まりを「ネヴォ」の2階で持った。

佐藤は、昭和6年の新築地劇団の小樽・札幌公演の準備で、上京し、阿佐ヶ谷の小林の家に泊めて貰った。幾日か過ぎてある日、小林が「これから弾圧がますますひどくなるので、自分は当分姿を消すかもしれない、君もここにいない方がよいと思うが」と言って、別れた。小林との最後だった。⁽²⁴⁾

(21) 1905年生まれ。1930年、赤色救援会札幌支部を結成。ペン・ネーム、南

順次。全協活動をする。小屋社同人。1938年検挙さる。

- (2) 日本プロレタリア美術家同盟（略称 AR）が「ナップ」に所属したのは、昭和4年1月24日。ARと「造形」が4月25日に合同して「日本プロレタリア美術家同盟」（略称 P・P）が結成される。

プロレタリア作家同盟は、1929年2月10日、日本プロレタリア作家同盟が結成大会を持ったもの。これは1934年5月に解散させられた。

- (23) 佐藤『ネヴォの記』35頁には、小林多喜二の前行に「清作」とあり、/がないが、新聞のコピーには「清作」がなく、/がある。清作の作である。
 (24) 佐藤『ネヴォの記』1976年。

6 「三・一五」から「蟹工船」まで

小説「三・一五」について、断片的に指摘をしておく。

小樽の文学上のベテラン高田紅果は、「一九二八年三月十五日といふ作品には、全く敬服したものである。」と論じている。⁽²⁵⁾

因藤荘助は、指摘している。「三月一五日」では、鈴木[源重]は、関羽髭の鈴木である。共産黨員として描かれているが、実際は違う。工藤の妻・お由は、「秋田のドン百姓の娘」「手は蟹のはさみのように両肩にぶら下がっていて」と書かれているが、そこには多喜二の母の面影が宿る。[主人公の一人]佐多の母にも多喜二の母の面影がある、と。⁽²⁶⁾

昭和3年のことである。因藤荘助は書いている。

多喜二にはじめて注目が集まった「一九二八年三月十五日」の発表記念会が公園通のレストランで催されたことがある。たしかその帰り路だったと思うが、多喜二を中に伊藤信二……とぼくと三人連れで雪路を歩いていた時、尊敬の念を現したかった若いぼくが「三月十五日」への讃辞を口に出すと、多喜二は得意そうに「今、あれよりもつと野心的な大作を書いているんだ。伊藤君は知ってるな」といった。⁽²⁷⁾

多喜二が『三・一五』を書いてから、『蟹工船』を書き始めるころだった。

この頃は、高商の後輩でもある野口七之助⁽²⁸⁾と多喜二は毎晩のように会っては話し合うことがつづいてきた。それも生やさしい話合いではない。議論がもつれると、すぐ喧嘩腰になり、相手を説伏するまで渡り合うので果てしがたい。始めは妙見川畔の喫茶店「越路」の二階で一時間か二時間ねばり、金のあるときは、どこかのおでん屋で飲みながらつづけ、しまいには一二時をまわって開店しているところがなくなると、雪の街路を「俺の方で送ろう」といって、小樽の南端(手宮町)まで歩く。だが話はいよいよこじれて結論に達しない。「では、こんどはこっちで送ろう」。そして烈しい語調を交わしながら、ぶらぶらと、こんどは街の北の端(勝納川)辺まで行く。「よし、では街の真ん中で別れよう」。また引き返す。そして話の方は未解決のまま、町の公園通りで別れる。もはや明け方である。夜がすっかり明けたこともあるが、とにかく二時や三時はざらである。真夜の小樽の街を、右に左に、歩きながら時間を費すのである。これが二、三日つづくと、いくら若い頃でもさすがに疲れる。ところが一日でも用事にかこつけて会わないと、「個人的な行動をとるとは怪しからん」と、多喜二は妙な理屈をつけて、ムキになって憤る。まったく始末がわるい男である。

生やさしくないのである。というのは、野口が疲れるのと同様、多喜二でも疲れているはずなのだが、あくまで頑張るのだ。根気のいいことは無類である。

ある時、北海道銀行の地下室、といっても夜の宿直室で、小林と野口は夜更けまでたっぷり話合える時間をもった。だから、満足感でいっぱいであった。御馳走を舌鼓をうって食るように、ひっそりとした地下の一室で二人は豊かな時間に舌鼓を打つことが出来た。

「いま、これまでにない新しい小説を書こうと思っているんだ。今晚は時間にせいげんはないから、それについてゆっくり話し合いたいんだ。」

「第一に、主人公がないのだ。どうだ、変わってるだろう。今までそんな小説はないよ。したがって固有名詞もないのだ。登場人物は仇名とか通称ばかりで動くことにする。つまり集団が主人公で、それを表現する適切な方法だ

と思うんだ。」これは『蟹工船』のことである。野口は、この小林の言葉を聞いて本当はすこし怪ぶんだ。

「たしかに面白い、しかしそれだけに難しいな。要は表現力が成否を決することになる」

「うん、そうなんだ。『三・一五』⁽²⁹⁾と同じリズムであれをもうすこしテンポを速くすれば、相当の効果がでると思うんだが、どうだい」

小林はしだいに熱気を帯びて、次から次へと自分の着想をつづける。これは稀しいことで、書く前にテーマをこんなに詳しく口外したのは初めてである。

この夜は、その後に生まれた「蟹工船」について、一二時頃まで語り合った。野口には妙に印象深かった。⁽³⁰⁾

伊藤整は書く。多喜二は「知人の間では、銀行員としても勤勉で有能なので、銀行では彼の思想傾向がわかっているがやめさせないという噂であった。」⁽³¹⁾

桜井長徳も言う。⁽³²⁾ そのころ(小樽に新劇がくるころ——引用者)小林は既に制作(=創作)の仕事をしていたが 当時の宮口小樽支店長は、小林は為替係りとしても優秀な行員だ、といつもほめていた。

多喜二は、日本海員組合の小樽支部から出されている機関紙「海上生活者新聞」の編集を手伝っていた。そのため、北洋の海の上での監獄部屋といわれる蟹工船の、生き地獄のような生活についてさうとうの知識を持っていた。そこでどうしてもその生活を書こうという考えは、前々から持っていた。「一九二八・三・一五」を書きおえると、さらに進んで「蟹工船」に手をつける。まずその実状の調査にとりかかった。

高商の同級生・乗富道夫が、函館の産業労働調査所支所にいた。乗富は、安田銀行函館支店につとめながら、この仕事もしていた。産業労働調査所は、いわば共産党の労働問題調査研究所である。東京では野坂参三⁽³³⁾らが働いて

いる。野呂栄太郎⁽³⁴⁾も東京のここで働くのである。函館支所は、カムチャツカのソヴィエト国営トラスト函館支所ともつながりがあった。⁽³⁵⁾

小林多喜二が「蟹工船」を書くため、その調査に小林の小樽高商時代の学友で、当時安田銀行函館支店に努めていた乗富のところに行ったのは、一九二八年の五、六月の頃で、それはちょうど「蟹工船」が函館で出航する時期であり、調査には もっともよい時であった。彼は乗富のところしばらく滞在し、その間に日魯漁業の会社の人や、函館合同労働組合の人々や、「蟹工船」の労働者ともじかに会って調査をした。

大島という人が、乗富に多喜二を紹介され、四五人で喫茶店に行ったが、小林はそこでノートをひろげ、一生懸命に書きものをしていたので、「キザな文学青年」だと、大島は思った。⁽³⁶⁾

島田正策と多喜二が毎日通る花園町に、丸文と左文字という書店があって、帰りには、たいがい寄って見た。「女囚徒」の話が一段落すると、今度は多喜二は、福本和夫の「マルクス主義の為に」を買って読んでいた。そして有名な「何処も否」というような文章を話した。多喜二は、「中々面倒だ」と言った。

多喜二が小説「蟹工船」を計画したのは、この話をしたこの年の暮れころからである。「俺は今主人公のいない小説を書こうと思っている。出てくる人物が皆主人公になるのだ。新しい形式だ」と話した。そしてレバダンスキーの「一週間」を読めと薦めた。その後「北洋に出ている蟹工船の船長から、手紙がきているが、全くひどい、海の監獄だ」といった。そして方々の友達に依頼してこの調査を進めていた。

村上由⁽³⁷⁾が島田に戦後話したが、村上は昭和2年の小樽の運輸労働者の争議⁽³⁸⁾の応援に来ていて、小林と会い、蟹工船の事について話したことがソモソモの始まりである、と。この問題を村上のパンフレットから引用したい。

村上が「磯野争議の応援に小樽にきたのは 昭和二年（一九二七年）の一

月のことだった。……合同労組の三階、といっても屋根うらだが、そこへとまりこんで活動した。そのころ小林多喜二がちょいちょい情報をもってきたり、ビラかきの手伝いにきたりしていた。……

また多喜二に北洋漁業、カニ工船の話をしたところ、もっとききたいというので、相当時間をかけて、カニ工船の漁夫・雑夫の虐待の話をかかした。

……負傷者をカニのゆで汁につける話、函館からつんでいったままのくさったような水でめしをたき、また、飲料水にする話、日本の軍艦護衛のもとに、ソ連のカニ網をぬすみとる話など、カニ工船の賃金闘争のときにくわしくきいていたのを多喜二にはなした。また、函館の乗富⁽³⁹⁾（……安田銀行員）のところにくわしい資料がたくさんあることも教えた。

多喜二はのちに乗富さんのところに問い合わせを出している。⁽⁴⁰⁾

高田紅果は書く。名作蟹工船は船にのって、現場を働いて帰った同志の報告が、彼に大作を書かせるヒントを与えたものだと聞いた、と。⁽⁴¹⁾

一方、因藤荘助は書く。「蟹工船」は、蟹工船に苦心してのり込んだ労組オルグの報告に基づいて、書いたといわれる、と。⁽⁴²⁾

高商卒業生の福田勇一郎（朝日新聞社代表取締役）は、言う。

乗富が函館の埠頭で遠洋漁船の船員から入手した手帳が多喜二に渡り、それがやがて「蟹工船」となった。⁽⁴³⁾

一九二六年九月、蟹工船で起きた漁夫や雑夫の虐待事件が、小樽の社会事件になっていた。大正15年秋、『函館毎日新聞』は、蟹工船博愛丸の驚くべき大惨状を述べた。多喜二は、1926年の博愛丸事件をモデルに『蟹工船』をかく。

桜井長徳（高商での友人）も、蟹工船について、多喜二に頼まれた。⁽⁴⁴⁾彼は言う。

私は、経済部の記者で海運関係も担当していたがある時、多喜二から北洋に行く蟹工船の船舶を調べてくれと頼まれたことがあった。調べた結果ひどく老朽船でびっくりした……

多喜二が言う、主人公のない作品について言うと、戯曲としては、世界では、ゲルハルト・ハウプトマン(Gerhart Hauptmann)の『織工』(Die Weber)がすでにある。それに、ここに出てきたように、レベジンスキーの『一週間』がまた、主人公のない小説であった。多喜二はこれに影響された。なお、集団が主人公になっているのは、前田河「三等船客」であって、これに影響された、と壺井は書く。⁽⁴⁵⁾それに、『蟹工船』は、全体としては、葉山の「海に生くる人々」の影響でもある。

日高は言う。大正時代の小説は、主人公から作品を考えた、だが多喜二のこの小説はその点で全く違う。多喜二は、主人公のいない小説の方法を映画から学んだ、と。⁽⁴⁶⁾

(25) 高田紅果「回想の多喜二」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年)。

(26) 「多喜二のプロフィル」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年)。

(27) 因藤荘助「多喜二のプロフィル」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年)。

(28) 小樽高商を昭和三年に卒業。

(29) 三一五、とは、すでに書いた「一九二八年三月十五日」のこと。

(30) 『緑丘』28ページ。

(31) 『伊藤整全集』第二三巻、265ページ。

(32) 「よだれをたらす多喜二」(小樽商大『緑丘』250号)

(33) 早世期からの古い共産党員。

(34) 拙稿「野呂栄太郎」(『商学討究』45の2)

(35) 江口渙。

(36) 西尾章二「『蟹工船』について」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年) 8-9ページ。

(37) 1901年、小樽の銭函に生まれる。当時、函館合同労組で活動。小樽の磯野争議の応援にくる。戦後、共産党統制委員長。

(38) 叙述が矛盾しているが、引用から分かるように、村上是港湾争議でなく、

磯野争議の応援で、来た。

- (39) 小樽高商の多喜二の同窓生。
- (40) 村上由『北海道労働運動ものがたり ― 私の歩んだ40年 ―』共産党北海道委, 1965年, 47-9ページ。
- (41) 高田「回想の多喜二」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年) 18ページ。
- (42) 因藤荘助「多喜二のプロフィール」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年)。
- (43) 『緑丘』。続いて、こうある。多喜二が銀行を辞めるのと前後して乗富も職をすてて上京し、經理士の仕事をしながら左の運動に入った。……乗富は多喜二葬儀にも出た。
- (44) 「よだれをたらす多喜二」, 主に後半部分。小樽商大緑丘 250号。
- (45) 「『蟹工船』における集団と個人の描写について」(『多喜二百合子研究』第1集)。
- (46) 日高昭二講演から, 小樽, 1994年10月。

7 『蟹工船』

多喜二の小説『蟹工船』の筋はこうである。

函館を出港した蟹工船は北洋に向かい、タラバガニ缶詰の船上製造にあたる。

船を支配したのは、水産会社から派遣された「浅川監督」の暴力だった。漁夫や雑夫は、強大な権力を握る浅川によって文字通り虫けらのように酷使され、殺された。団結して抵抗する漁夫らは、蟹工船を護衛する帝国海軍の駆逐艦に連れ去られる。⁽⁴⁷⁾

『蟹工船』は、登場人物に名前がないとされるが、例外は、浅川監督である。これは阿部をモデルにしたのであろう。

『蟹工船』は、『戦旗』昭和4年, 5, 6月号に連載され, 後半を載せた6

月号は発禁となったが、両号とも1万2千部を発行した。

『蟹工船』初版（9月）は、装ていは須山計一、改訂版（11月）は、装ていは浅野方夫、改訂普及版（昭和30年3月）は、装ていが大月源二、である。半年の間に3万5千部売った。初版は伏せ字がない、あるいは伏せ字のない初版がある。『読売新聞』で、昭和29年度上半期最高の傑作と絶賛された。

和田は書く。

平林初之輔⁽⁴⁸⁾が「蟹工船」を「朝日新聞」（昭和4年）の「文芸時評」で激賞したことが、彼〔多喜二〕が文学の検舞台に踊り出すスポットライトを宛てた役目を果たした……。それからまもなく中央公論社や新潮社、改造社からも、原稿依頼が来たと言語の彼の口調からは、いままでにない精気漲るものが感じられた。⁽⁴⁹⁾

武田は言う。

『蟹工船』を、武田は勝見たちと合評したことがある。多喜二が、海の描写を「どうだ、これうまいだろ、俺もこのくらいうまくなったんだ、どうだ」ってね。勝見が何か批評した。⁽⁵⁰⁾

因藤は書く。

三星パンのかんばんがぶら下がっている若竹町の多喜二の小さな家の、せまい屋根裏部屋で、「蟹工船」の外国語（独、露、支⁽⁵¹⁾？）のほん訳を、小さな本ダナから取り出してみせてくれた時も、少なからず得意気な面持だった。だが……多喜二のそんな得意気な様子も、決して人を反発させるような不快なものではなかつたのはたしかだ。（句点補う）⁽⁵²⁾

もと小樽の製缶工場に勤めていた人が、樺太で、多喜二の『蟹工船』の船長のモデルとなった人物に会った。その人物は、彼に「小樽に小説家がいるだろう」と言い、「いる」と答えると、その小説家は自分のことをずいぶん大げさに書いた、と言った。ただし、その人物がそう意識しているのが正しいわけではない。この人物は、そうすると、阿部金之助であろう。阿部は、四離滅裂の述懐を、前出新聞記事で⁽⁵³⁾しているほどだから、当然である。

松木氏は講演⁽⁵⁴⁾で語る。

小林多喜二は、天皇制を小説の中においた初めての作家であり、葉山の「海に生きる人々」がプロレタリア小説としてあるが、国家権力までいっていない、と。

丸谷は書く。

比喩は作文術で重要である。色彩の場合だけに話を限れば、例の有名な、「納豆の糸のような雨がしきりなしに、それと同じ色の不透明な海に降った」（小林多喜二『蟹工船』）が さしあたり頭に浮かぶ。それは、黄いろとか何とか、いはゆる色名を使ふよりも具体的に的確に色彩を見せてくれるし、感覚を刺激する度合が強いし、……⁽⁵⁵⁾

伊藤整は書く。

小林多喜二の小説の「蟹工船」で使っている漁夫の言葉は秋田系の多い北海道の海岸語である。多喜二は秋田県人の系統かも知れないとあれを読みながら思った。⁽⁵⁶⁾

『蟹工船』は、中国語、ロシア語、チェコ語、英語、ドイツ語に訳された。チェコ語訳『蟹工船』は、ウラスト・ヒルスカ（プラハ大学教授）訳で、彼女は『太陽のない町』も訳した。ロシア語訳は、ナターリア・フェルドマンのロシア語訳で、その書には『蟹工船』『三・一五』がある。また1957年、国立芸術文学出版所から出ており、『小林多喜二選集』1巻、として、『防雪林』『沼尻村』『蟹工船』『三・一五』などが入った。中国語訳『蟹工船』は、潘念之訳で、1930年4月に出た。

帝国劇場で、「北緯五十度以北」の題で、「蟹工船」が、公演された。五幕もので、演出は土方興志、新築地劇団の公演で、10月26日より31日までであった。

『蟹工船』の肉筆原稿は、発見者によると、その父親が、多喜二の死の直後、古本屋に出ていたのを5円で買いとり、自宅の片隅に保存しておいたのを、書斎整理の折りに見つけた。1968年、没後35周年の日の直前、2月5日の直前だった。⁽⁵⁷⁾

- (47) 『朝日新聞』1999・10・13 特集から。
- (48) 平林, 1892-1931。評論家。「種蒔く人」に参加。初期プロレタリア文学の重要な理論家。
- (49) 和田克己, 『緑丘』30 ページ。
- (50) 『北方文学』1968年3月, 57 ページ。
- (51) 支那, つまり中国のこと。
- (52) 因藤荘助「多喜二のプロフィール」(『青年論壇』青年論壇社 札幌 1948年)。
- (53) 別稿を見よ。「蟹工船と漁夫虐待事件」(仮題)『商学討究』予定。
- (54) 小樽小林多喜二祭で。
- (55) 丸谷才一『文章読本』中公文庫 1980年, 167~8 ページ。
- (56) 『伊藤整全集』二三巻 三二ページ。
- (57) 土井大助『小林多喜二』汐文社 1979年 8 ページ。